



Title	ボージプリーの詩人たち
Author(s)	竹崎, 隆太郎
Citation	印度民俗研究. 2016, 15, p. 63-88
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56220">https://hdl.handle.net/11094/56220</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ボージプリーの詩人たち

竹崎 隆太郎

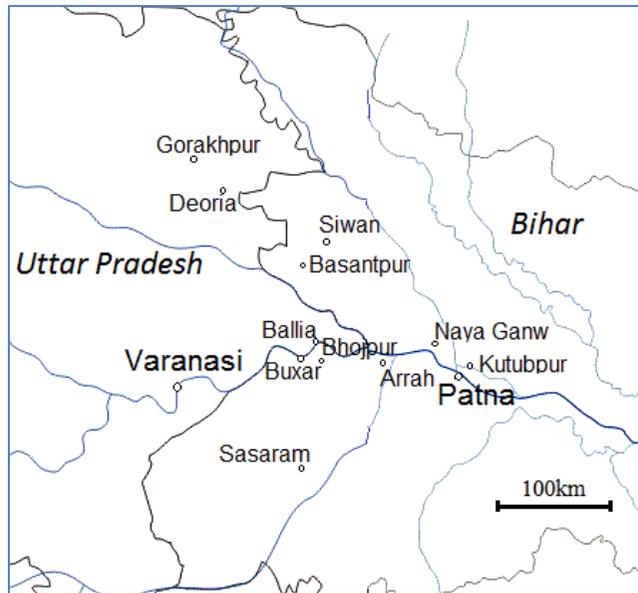


図1 ボージプリー語の詩人たちの出身地地図

インドのウッタル・プラデーシュからビハール州にわたりおよそ 3300 万人の話者人口を有するボージプリー語は、今まであまり研究されていない言語である。言語形態的には異なる構造を持つにもかかわらず、ヒンディー語東部方言に含められることもあり、ボージプリー語による地方文化はヒンディー語文化圏の一部と片付けられ、とりたてて研究されてこなかった歴史がある。なお、ボージプリー語（北部、デーオリヤー方言）の動詞形態については拙稿 TAKEZAKI 2014 に簡潔に記した。またアワディーやブラジ・バーシャーのようなヒンディー語方言が文語として用いられ大詩人たちを輩出してきた一方で、ボージプリー語にはいわゆる大詩人がおらず、目立った文芸活動が認められなかったことも人々の注目を惹きつけなかった理由としてあげられよう。だが、ボージプリー語の文学研究者である、アルジュン・ティワリー博士 (Dr. Arjuna Tivārī) によりボージプリー語で記された『ボージプリー文学史 *Bhojapurī Sāhitya ke Itihāsa*』はその文学活動の一つの手引きとなる。本書はボージプリー文学をいくつかの時代に分けて分類するが、そのうちの "prasāra kāla (普及期)" を論じる章の ボージプリーの詩文学 *Bhojapurī Kāvya Sāhitya* (p.148ff.) の節では、現代ボージプリー詩人の生年・生地、経歴と共に、その詩作品の簡潔な紹介がなされている（ボージプリー語内部に方言差が有るので、出身地の情報は重要となる）。ここでは、反社会的な詩、牧歌的な詩、ヒロインがヒーローに別れのつらさを訴えるというインド古典詩のテーマを踏襲する詩など、その内容は多岐にわたり、素朴ながらも独特の味わいがある。この『ボージプリー文学史』に掲載されている近現代の詩人から何人かを選び、これまであまり知られていないボージプリー詩を紹介するのが本稿の目的である。詩人の名前と生年月日、生地の後に、「」に入れてその経歴紹介をも翻訳した。また TIWARI 1960:283 による北・南・西の方言分布地図により、出身地が属する方言別に分類を試みた。

ボージプリー語の母音脱落は基本的にはヒンディーのそれとおおよそ同じと考えてよいが、karavalasa [karawalas] の様に過去接辞 -l- の前では脱落しない、uṭha' [uṭha] の様に tūṃ に対する命令形語尾 -a は語末でも脱落せず、これはアヴァグラハのサインで表示される（本稿では ' で転写）など若干の例外があるので、本稿のデーヴァナーガリーの翻字は、ALA-LC 方式に従っていた。また慣習に従い分音は tréma で示した。

南部方言地域出身者（バクサル・ボージプル・バリヤー・サーラン・サーラーラーム・シャーハーバード・スィーワーン・バサントプル）

### バクサル出身者

#### p.157

カムラープラサード・ミシュラ・“ヴィプラ”

Kamalāprasāda Miśra “Vipra” (1908年10月9日生，ソーンバルサーSonabarasā, バクサル Baksara)

「ヴィプラ氏はヒンディーとサンスクリットの知識人であった。彼はカーシーから出版された『先触れ*agradūta*』の編集もしていた。彼の詩集は『蜜の森*madhuvana*』である。バーブー・クンワル・スィン<sup>1</sup>についても彼は一篇の美しい詩を著している。8月15日には、独立に対する詩人の愛が表明されている。以下に数行を掲げる。」

barabāda bhaīla jaba lākhani<sup>2</sup> ghara

---

<sup>1</sup> 1857年のスィパーヒーの乱に参加した独立闘争の英雄。

<sup>2</sup> lākhの複数形。

tavatā para ī dina āila bā  
pandraha agasta kā avasara para  
gharaghara jhaṇḍā phaharāila bā

幾多の家々が破壊されたとき、  
その時、この日が来た。  
8月15日の機に  
家々に旗がはためいた。(1948年8月15日のインド独立記念日を詠んだもの。)

**p.164**

スヴァーミー・ヴィムラーンド・サラスヴァティ  
Svāmī Vimalānda Sarasvatī (1921年1月14日生, マングラウ  
Maṅgarāva, バクサル Baksara)

「彼はボージプリー語とその文学の発展普及に特に寄与している。ボージプリーの散文韻文両方による彼の作品は、新聞・雑誌において発表されてきている。彼の物語集『賢者の証明 *jehali ke sanadi*』と彼の長編叙事詩『仏陀行状記 *baüddhāyana*』はボージプリー語で発表された著作である。スワーミーの自由詩の内に記された "仏陀の歌 *baüddha līlā*" から、以下の数行を例として掲げる。」

jekara manavāṃ buṛakī maralasa  
gaīla chīra sāgara kā bhītara;  
payalasi ū amarita ke chariyā---  
okare ratana bhemṭāila  
ākhira pipare bodha karavalasa

その心が飛び込んで、

乳海の中へと行った者 (仏陀) は、  
甘露のかけらを飲み、  
その宝を見出した。  
遂には菩提樹の下で悟りを開いた。(仏陀の悟りを詠んだもの)

### **ボージブル出身者**

#### **p.158**

パーンデーイ・ナルマデーシュヴァル・サハーイ

Pāṇḍeya Narmadeśvara Sahāya (1911年3月3日生, クッラリヤー  
Kulhariyā, ボージブル Bhojapura)

「彼はパトナー高等裁判所の弁護士で、3ヶ月に一度発行される『曙 *amjora*』の編集者であった。彼はボージプリー文学の興隆においてパールテンドゥ（・ハリシュチャンドル）の文学サークルのような働きを為したのである。この他に、彼はボージプリー・アカデミーと全インド・ボージプリー文学会議の創立メンバーでもある。ガザル形式の抒情詩の数行を以下に引用する。」

haṭā patajhāra ke paharā tanika madhumāsa āve da,  
udāsala mana kā deharī para, kirina savalāsa āve da;  
kasaka etanā masaki jātā karejā, darda aīsana bā---  
jie ke hosilā le ke nayā ullāsa āve da

秋<sup>3</sup>の番人よ、去れ！少しの春よ、来れ。  
心の哀しみを片隅に、光線は快活さと共に来たれ。

---

<sup>3</sup> māgha 月と phālguna 月の間の時期で、実質上は冬である。

痛みはこれ程、心臓は押しつぶされる、苦しみはかくの如し。

生きる望みのために、新たなる歓びは来よ。

**p.157**

ラームヴァチャン・ドヴィヴェーディー・“アルヴィンド”  
Rāmavacana Dvivedī “Aravinda” (1905年11月6日、ドゥバウリーDubaulī, ボージプル Bhojapura 生)

「彼はヒンディー語とボージプリー語の両方で詩を書いた。ボージプリー語の詩で彼は金賞をも貰った。『村の方へ *gāṁva ke or*』というボージプリー語の詩集が出版されたが、その内の『戦いへ *laṛāi ke or*』はかなり人気がある。以下に例を掲げる。」

dusamana desa ke dabāve khātī āvata bāte  
uṭha' bhāiyā uṭha' aba dera nā lagāim jā  
laṛe bhīre meṃ to hama sagare prasiddhi bānī  
āva' ī bahādurī laṛāi meṃ dekhāi jā

敵が国を滅ぼさんとやって来ている。  
起てよ兄弟、覚めよ今、遅るるなかれ。  
戦いの衝突の中では、私は誰よりも名高い。  
来たれ！この勇敢さを戦いにおいて見せよ。

**バリヤー出身者**

**p.152**

パンディット・ドゥードナート・ウパーッデヤーイ

Pamḍit Dūdhanātha Upādhyāya (1863 年生, ダヤー・チャプラー Dayā Chaparā, バリヤーBaliyā)

「彼の初めて出版された詩集『入隊の歌 *bharatī ke gīta*』では、インドの若者たちに、軍隊に入隊せよと呼びかける。二番目の詩集『地震 25 選 *bhūkampa pacīsī*』では 1934 年の壊滅的地震の様子が迫真的に描き出されており、三番目の詩集『牛の嘆きの詩集 *go vilāpa chandāvalī*』では雌牛を守ることの大切さについて述べられている。」

hamanī kā sabha kehū bāmhana chatiri hoke,  
rana meṃ calabi, nāhiṃ taniko ḍerāibi |  
aba le cūkalīm, baṛa bāura kaīlihāṃ jā,  
aba purūkhani ke nā naiyāṃ haṃsāibi |

我々バラモンは皆誰もがクシャトリヤになって、  
戦場に赴こう、少しも恐れまい。  
今までに我々は敗れた、大馬鹿者と言われた、  
今や父祖たちの名を我々は辱めまい。  
(出典が記されていないが内容的に第一の詩集から採ったものと思われる。)

#### p.156

ボージプリー・バーンカー、バーブー・プラスィッディ・ナーラーヤン・シン

Bhojapurī Bāṃkā Bābū Prasiddhi Nārāyaṇa Siṃha (1903 年生, チトバラ村 Citabarā Gāṃva, バリヤーBaliyā)

「早くから心に愛国心を抱き、政治に関心を寄せた。彼の詩の主題は大概、政治であったが、それは力と熱情で満ち溢れていた。」

1857年のインド大反乱の生き生きとした情景を詩の中で描いた。1945年にジャワーハルラール・ネーヘル（ネルー）がバリヤーにやって来た際、それを歓迎して書いた詩は活力に満ち、大変な人気を博した。」

jaba santāvana ke rāra bhāila,  
vīrana ke vīra pukāra bhāila;  
baliyā ke maṅgala pāṃḍe ke  
bali vedī se lalakāra bhāila |  
maṅgala mastī meṃ cūra calala,  
pahilā bāgī maśahūra calala;  
gorana kā palaṭana kā āge  
baliyā ke bāṃkā śūra calala |

[18]57年の戦い（スーパーヒーの乱）があったとき、  
勇士たちのうちの勇士が呼ばれた。  
バリヤーのマンガル・パーンデー（バラモン階級出身の闘  
争家の名前）の  
供犠の祭壇に励まされた。  
幸福な熱狂に酔いしれた。  
最初の反乱は有名になった。  
白人（イギリス人）たちの軍隊の前に、  
バリヤーの若者たちは勇敢になった。

## サーラン出身者

### **p.152**

ラーシュトルカヴィ（“国民詩人”）・ラグヴィール・ナーラーヤン

Rāṣṭrakavi Raghuvīra Nārāyaṇa (1884 年 10 月 10 日生—1955 年没。ナヤー村 Nayā Gāṃva, サーラン Sārana)

「人気の歌『旅人 *baṭohiyā*』の作者ラグヴィール・ナーラーヤンは学校で、パンディット・アンビカーダット氏とラーマーヴェータル・シャルマー氏に教えを受けた。高名なスイーターラームシャラン・バグワーン・プラサード“ループカラー (芸術の権化)”の勧めでヒンディー語で、またアーラーのバーブー・シヴァナンダン・サハーイ氏の勧めでブラジ・バーシャーで作詩することを学んだ。しかし、彼の全ての詩の中で最も名高い作品は、ボージプリー語によって書かれている。ラグヴィール氏はボージプリー語の『旅人 *baṭohiyā*』を書いて、世に高名な国民詩人となった。以下の例を見て頂きたい。」

sundara subhūmi bhaīyā bhārata ke desavā se  
mora prāna base hima khoḥa re baṭohiyā<sup>4</sup>  
eka dvāra ghere rāmā hima kotavālavā se  
tīna dvārā siṃdhu ghaharāve re baṭohiyā

美しい、よい地だ、兄弟よ、インドの国は、  
わが心は雪の谷間に住んでいる、おお旅人よ。  
一つの扉はヒマーラヤに囲まれている、  
三つの扉は海へと轟き行く、おお旅人よ。

**p.153f.**

“ボージプリー語のシェイクスピア” ビカーリー・タークル  
Bhikhārī Ṭhākura (1887 年生—1971 年没、クトゥブプル  
Kutubapura, サーラン Sārana)

---

<sup>4</sup> 「旅人」の意味であるが、作者のサブネームでもある。

「タークルは、俳優、歌手、踊り手、作家、監督、劇作家、詩人であった。社会に広まった悪に彼は自分の詩によって激しい攻撃を加えた。彼の詩の中では、女性隔離、花嫁持参金、幼児婚、老人婚といった社会的悪習の剥きだしの姿が浮き彫りにされている。自らボージプリー文学の最高の人物であるビカーリー・タークルは、もとより一人の帰依者であった。サント・トゥルスイーダスを師と仰ぎ、その「ラームチャリトマーナス」は彼の命であった。『ラーダーとクリシュナの春 *rādheśyāma bahāra*』『シヴァの結婚 *śiva-vivāha*』のような作品からは、彼がクリシュナとシヴァ神に対して深い信仰を持っていた事が分かる。サードゥヤサントや師を崇敬の感情で見るタークルは、ボージプリー文学の発展者に数えられねばならない。「ビカーリー」と「ボージプリー」の二語はお互いに同義であった、彼のボージプリー語は純粹で、易しく、自然で、分かり易い。マイティリー語がヴィッデヤーパーティによって、ベンガル語がグルデーヴ（ロビンドロナト・タクル）によって名誉あるように、ボージプリー語はビカーリー・タークルによって名誉あるのである。彼は民俗技芸の大家であった。彼は繰り返しこのように書き、話していた——『母語は家の（粗）砂糖である *māṭṛbhāṣā ghara kā gūra hai*』と。」

nāma bhikhārī, kāma bhikārī, rūpa bhikhārī mora  
 t̥hāṭha-palāna-makāna bhikhārī, bhaīla cahum̃-diśi śora

私の名もビカーリー<sup>5</sup>、仕事もビカーリー、姿かたちもビカーリー、  
 装いも土地も家もビカーリー、四方に旋風を巻き起こした。

calanī ke cālala dulahā, sūpa ke jhaṭakārāla he

<sup>5</sup> 「乞食」の意味であるが、作者のペンネームでもある。

diakā ke lāgala bā duāre bājā bājala he |  
āṁvā ke pākala dulahā, jhāvāṁ ke jhārāla he,  
kalachula ke dāgala dulahā, bakalolapura se bhāgala he |  
āma lekhā pākala dulahā, gāṁva ke nikālala he,  
āisana bakalola bara caṭakadevā ke bhāvala he |  
maūrī lagāvala dulahā, jāmā pahirāvala he,  
kahata 'bhikhārī' haūana rāmo ke banāvala he |

花婿は篩を通りそうな、箕でふるい落とされそうな程（痩せている）。

灯りがともっている、扉の前では楽隊が演奏している。

花婿はマンゴーが熟れたよう、（形の悪い）黒煉瓦を焼いたよう。

杓子でやけどさせた（やんちゃであったの意）、阿呆村から逃げてきたのだ。

丁度マンゴーが熟れたようだ（齢が行き過ぎ）、村から出てきたのだ。

この様に阿呆な婿は、舅の気に入る。

頭に着けている、ジャーマー（新郎の婚礼の衣裳）を着ている、

“ビカーリー”は言う。神によって造られたのだと。

（婚礼で花嫁側が花婿側に対して歌う悪口の歌（gālī））

## サーラーラーム出身者

### **p.172**

ラーメーシュヴァル・スィン・カーシアプ教授

Prof. Rāmeśvara Siṁha Kāśyapa (1929年8月16日生, セームラー-Semarā, サーラーラーム Sāsārāma)

「カーシャプ氏はパトナーのBNカレッジのヒンディー語の教授であった。後に彼はアーラーにある或るカレッジの学長となり、そこで長く勤めた後辞職した。

彼がボージプリー語で書いた劇『ローハー・スィン *Lohā Siṃha*』はラジオを通じ、ボージプリー語圏全域で有名になった。この映画版も作られ、その原作、シナリオ、セリフ、歌詞を氏が書き、ローハー・スィン役も自らこなした。このように、カーシャプ氏はボージプリー語とヒンディー語の高名な劇作家、詩人、小説家、作家、随筆家として確固たる地位を占めている。ユーモア・風刺に深く通じているしるしは、彼のあらゆる作品に見て取れる。彼の劇『ローハー・スィン *Lohā Siṃha*』の名声は、ラジオによって全国的なものになった。ボージプリー語の詩作品において、美しい比喻を用いることにカーシャプ氏は長けている。彼には『夜明けの叙述 *prabhāta varṇana*』という名高い詩がある」

gorakī biṭiyavā ṭikulī lagāke,  
purub kināre talaiyā nahāke  
citavana se apanā jādū calāke,  
tanikā lajā, taba vihaṃsa khilakhilā ke  
\*\*\*\*\*  
chappara para āila osārā meṃ camakala,  
cupake se gorī taba aṃganā meṃ utarala,  
lāgala khirikiyana se haṃsa-haṃsa ke jhāṃke  
jahavāṃ nā tāke ke, ohijo ī tāke |

色白の娘（月のこと）が額の印をつけて、  
池の東のへり（東の空のこと）で水浴びをする。  
眼差しの魔法で魅惑して、  
少しはにかむ、その時花開くようにうち笑って。

.....

屋根の上に来た、玄関で輝いた。  
ゆっくりと美しい娘はその時庭の中へと降りてきた。  
留まった、窓から笑って覗いて、  
誰も見ていない場所を、この娘は見ている。

### シャーハーバード（ビハールのアーラー地域）出身者

#### p.155

プラーチャーリア（学長）・マノーランジャン・プラサード・ス  
イン

Prācārya Manoraṃjana Prasāda Siṃha (1900 年 10 月 10 日生—  
1971 年没、シャーハーバード Śāhābāda 生)

「マノーランジャン氏は、以前はカーシー・ヒンドゥー大学で英語の講師であった。後にチャプラーのラージェンドル・カレッジの学長となり、勤め終えた後、デーオガルのヒンディー・ヴィッデャーピートの学長となった。その後、ヴリンダーワンのアーシュラムで最期の時を過ごした。ついにラーンチーの街で 1971 年、現世の遊戯ともいふべき生を終えたのである。ボージプリー語で書かれた彼の歌劇『本の中で一つの世界が変わった *kitābana mem ego duniyām badal bā*』は非常に人気を博した。

『鳥は毎朝鳴く、我々の庭で *kāgā bhore-bhore bolelā hamāra aṃganā*』と『イギリス人 *phiraṃgiyā*』によって、彼は不滅となった。

彼の詩作品の内、人々に最も愛唱されるのが『イギリス人 *phiraṃgiyā*』である。これは不服従運動の最中の 1921 年において執筆された。この作品の目的は、ボージプリー民衆の民族意識を目覚めさせることであった。」

sundara sughara bhūmi bhārata ke rahe rāmā

āja ihe bhaīla masāna re phiraṃgiyā<sup>6</sup>.

ana, dhana, jana, bala, buddhi saba nāśa bhaīla

kavano ke nā rahala niśāna re phiraṃgiyā

インドの大地は美しく、素晴らしい、おお愛する人よ！

今日この大地は墓地となってしまった、おオイギリス人たちよ！

穀物、富、人々、力、知恵——全ては破壊されてしまった、一つの痕跡も残っていないのだ、おオイギリス人よ！

「全インドの言語に対する彼の善意には見習うべきものがある：」

paḍhuā-likhuā kariheṃ māpha | hama ta bāta kahīṃle sāpha ||

hamarā nā kehū se baira | nā khīṃcaba kehū ke paira ||

hama ta sabake karaba bhalāī | jetanā hamarā se bana pāī ||

hindī ha bhārata ke bhāśā | ūhe eka rāṣṭra ke āsā ||

hama okaro bhaṃḍāra baṃhāiba | ohū meṃ bolaba ā gāiba ||

tabo na choṛaba āpana bolī | cāhe kehū māre golī ||

je magahī tirahutiya bhāī | unahū se hama kahaba bujhāī ||

ūho bolasu āpana bolī | bhare niraṃtara unako jholī ||

読み書きする人々よ、赦していただきたい。私は明確に話すから。

私には誰も敵意はない。誰かの足を引っ張ろうとも思わない。

私は皆に善を為そうと思っている、私がしてもらっただけは。

ヒンディー語はインドの言葉だ。それは一国の希望だ。

私はその宝庫を増やそう。それで私は話し、歌おう。

---

<sup>6</sup> phiraṃgī の複数形

それでも自分の方言は捨てまい、誰かが私を銃で撃つとしても。

マガダの、ティルフトの兄弟に私は説明しよう：

彼は自分の方言を話すがよい、つねにその袋をいっぱいにせよ、と。

### p.155

ボージプリー文学の“主 nātha”、ドウルガー・シャンカル・プラサード・シン

Durgā Śaṅkara Prasāda Siṃha (1886 年生, ディリープル Dilīpapura, シャーハーバード Śāhābāda)

「ドウルガー・シャンカル・バーブーは殆どあらゆるジャンルにおいて作品を書いており、ボージプリー語のヴァールミーキ（叙事詩ラーマヤナの作者）といわれる。詩においては、彼は「主 nātha」と呼ばれる。彼の二冊の詩集は、『文学ラーマヤナ *Sāhitya Rāmāyana*』と『考え *Gunāvana*』が出版されており非常に有名である。“文学ラーマヤナ *Sāhitya Rāmāyana*”はボージプリー語の初の長編叙事詩と考えられており、その中ではラーマ王の人生の歩みが描かれる。『考え *gunāvana*』は詩人の晩年の作品である。」

kaīse karī gunāvana prītama, ehī gunāvana meṃ nū tū hūṃ

socata gunata, baiṭhala bānī, rahi rahi mana meṃ bhāvata jālā

どうやって考え／善きことを為そうか、最愛の人よ！この善き考えの中にそう、お前はいない。

思いながら、考えながら、私は座り込んでいる。そうするうちに心の中に愛しい人がやって来る。

## スィーワーン出身者

### **p.161**

ゴースワミー・チャンドレーシュヴァルバルティー  
Gosvāmī Candreśvarabhāratī (生年月日無記載, コーラーリー・マ  
ティヤー Korārī Maṭhiyā, ダラウンダー Daraumdā, スィーワーン  
Sīvāna)

「彼は詩を書き、それを聞かせて回った。」

hama rāja kisāna banaītīm ho.

dhanī, garība, amīra, sabhī ke eke rāha calaītīm ho.

bhārata mem vidhāna banā ke ghara-ghara sūta kataītīm ho.

māṭṛbhūmi ke balivedī para candeśvara sīsa jhukaītīm ho.

jab-jab janama lītīm bhārata mem, bali vedī para jaītīm ho.

私達は農民の王国を作る。

富めるもの、貧しきもの、金持ち——皆が一つの道を行く。

印度において法律を作って、家々で糸を紡ぐ<sup>7</sup>。

母なる大地の供犠の祭壇に、（私）チャンドレーシュヴァ  
ルは頭を垂れる。

印度に生を享けた限りは、供犠の祭壇に捧げ続ける。

## バサントプル出身者

### **p.235**

ジャレーシュヴァルダット・“バルボーラー”  
Jaleśvaradatta “Balabholā” (生年月日無記載, バサントプル  
Basamtapura, ムザッフアルプル Muzaphpharpura 在住)

---

<sup>7</sup> ガーンディーの糸紡ぎへの言及。

「彼はムザッファルプル在住である。1987年にこの本が出版された。バガヴァッドギーターの18章の翻案は非常に成功している。」

バガヴァッドギーターのボージプリー語訳の例として、人口に膾炙した<sup>8</sup>輪廻を説く詩句の翻訳が掲載されている。

jaīse vastra purāna choṛa ke  
logavā dhārana nayā karelā  
osahīm dehī deha choṛa ke  
nayā anekana deha dharelā

人が古い着物を捨てて、  
新しいのを纏う（習慣形）ように、  
まさにそのように魂は肉体を捨てて、  
別の新しい肉体を纏う（習慣形）。

参考：サンスクリット原文（ギーター 2.22）

vāsāṃsi jīrṇāni yathā vihāya  
navāni gṛhṇāti naro 'parāṇi  
tathā śarīrāṇi vihāya jīrṇāni  
anyāni saṃyāti navāni dehī

北部方言地域出身者（ゴーラクプル・デーオリヤー）

---

<sup>8</sup> 例えば映画『ガンガー・ヤムナー Gaṅgā Jamanā』のラストシーンで、死にゆく主人公の周りに集まった人々がこの句をサンスクリット語で唱和するシーンがある。

## ゴーラクプル出身者

### **p.160**

カヴィヴァル・チャンチャリーク

Kavivara Caṃcarīka (生年月日無記載, バインサーバーザール  
Bhaimśā Bājāra, ゴーラクプル Gorakhapura)

「彼の最高の作品は、『村歌の捧げもの *grāmagītānjali*』である。  
これは 1935 年バナーラスから出版された。チャンチャリーク氏は  
民族的・社会的主題を採り上げて自らの歌に著した。」

jāhu jāhu piyā desa ke laṛaiyā ho  
choṛi de ab kadariyā, hām̃ siyārāma se banī.  
hoke marada maradumī aba dekhalāū  
deśavā meṃ hoiheṃ laṛaiyā, hām̃ siyārāma ke banī.  
行け、行け、愛する者よ、国の戦いのため。（独立戦争）  
今や怠惰を捨てよ、(...)  
男となって、男らしさを今見せよ。  
国の中では戦いがあるであろう。(...)

### **p.160**

マンナン・ドヴィヴェーディー・ガジプリー

Mannana Dvivedī Gajapurī (生年月日無記載, ガジプル Gajapura,  
ゴーラクプル Gorakhapura)

「彼はボージプリー語の高名な詩人である。『サルワリヤー  
*Saravariyā*』という題の彼のボージプリー語による詩は、ICS<sup>9</sup>の  
試験の学習カリキュラムに含まれていた。月刊誌『心の愉悅  
*Manoraṃjana*』の初号に発表された彼のボージプリー語の詩の

---

<sup>9</sup> Imperial/Indian Civil Service のことか。

一例を以下に引用する。異国にいるヒロインが、異国にいる恋人に懇願する場面である。」

jāye ke kaise kahīm paradesī raha' bhara phāguna caīta meṃ  
jaiha'.

cīṭhī likhāke turanta paṭhaīha' tilāka ha' jo hama ke  
bhulavaīha'

(ヒロインが主人公に曰く)

どうして何処かに行ってしまうの、とつくにびとよ、留まれ、

パーグン月<sup>10</sup>いっぱい。そのチャイト月（パーグンの翌月）に出発するのだ。

手紙を書いてもらって<sup>11</sup>、すぐに送ってくれ。

誓って私の事を忘れてくれるな。

## デーオリヤー出身者

### **p.149**

ラール・カドガ・バハードウル・マッラ

Lāla Khaḍga Bahādura Malla (生年月日無記載, マジャウリー・ラージ Majhaurī Rāj, デーオリヤー-Devariya)

「彼はボージプリー語で『甘露の滴 *sudhābūṃda*』を書いた。」

terī aṃkhiyā re naśīlī, bhauheṃ caṛhalī kamāna

katunā ghāyala ita-uta loṭeṃ katunā tajale parāna |

lāla bhaye kitane dīvāne bakata āne-ke āna

<sup>10</sup>春の祭典ホーリー祭がこの月にある。

<sup>11</sup>字が書けないので人に書いてもらう。

terī aṁkhiyā re naśīlī, bhauheṃ caṛhalī kamāna ||

お前の眼は、おお、麻薬だ、両眉は引き絞った弓だ。  
幾人を傷つけたことか、のたうちまわって、幾人が命を捨てたことか。  
どれ程の若者がお互いに話しつつ気違いになったことか。  
お前の眼は、おお、麻薬だ、眉は吊り上がった／顰めた弓だ。

「ヒンディー詩人ラルール・カドガ・バハードウル・マッラはボージプリー語では *lāla bhaye kitane dīvāne bakata āne-ke āna* のような愛の情緒の作品を作ったということを知る必要がある。彼はジャーナリストであり、彼の『クシャトリヤ雑誌』のモットーは、『アルジュナの誓は二つ——卑屈さを見せぬことと、逃げ出さぬこと』であった。」

### p.165

モーティー・B・A

Motī B. A. (1919年8月1日生, バレージ—Barejī, デーオリヤー Devariyā)

「1944年から1952年までモーティー氏はラーホールのパンチョーリー・アート・ピクチャーズ、ボンバイのプラカーシュ・ピクチャーズとフィルミスターン・ピクチャーズ（全て映画会社の名）で作詞家として国中で有名になり、多くの名声と富を手にした。その名声は余りに大きくなったので迷惑を働く人も出始めた程だった。そのような妬む人々を嫌悪したくないとの清い心から、パンディット・モーティーラルール・ウパーッデヤーイ（モーティー氏の本名）は講師として、1952年からウツタルプラデーシュ

はデーオリヤー地域、バルハジのシュリークリシュナ・インター・カレッジで、教職を始めた。

『河の向こう *nadiyā ke pāra*』の作詞者にして並外れたガザル『恋人 *sājana*』の書き手であり、ボンバイー、イラーハーバード、ラクナウー、ヴァーラーナスィー、ゴーラクプルのラジオで囀るホトトギスの如きモーティー氏は、今日のボージプリー文学界の傑物であった。ヒンディー語・ウルドゥー語・ボージプリー語を完全に使いこなす氏は、今日まで十冊を超える味わいのある本を出している。『モーティー（真珠）のムクタク *motī ke muktaka*』『マフアー樹の庭 *mahuābārī*』『カポックの花 *semara ke phūla*』『森々にホトトギスは鳴く *bana-bana bolele koiliyā*』は、氏の高名な詩集である。そのボージプリー語の歌『河の向こう *nadiyā ke pāra*』は最も人気がある作品であり、彼を人気の頂点に押し上げた。『マフアー樹の庭 *mahuābārī*』も同様に人気がある作品であるが、その中では村の自然が非常に美しく描写されている。以下に例を掲げる：」

asom āila mahuābārī meṃ bahāra sajanī |

koṃcavā mātala bhuiyā chūve, mahuā rase-rase cūve:

jaba bahe bhinusāre ke beyāra sajanī |...

今年、マフアーの樹の庭園に喜びがやって来た、愛する人よ。

若芽は酔って大地に触る、マフアーの樹の蜜はゆっくりゆっくりと滴る、

早朝の空気が流れる時、愛する人よ。

西部方言地域出身者（バナーラス）

### バナーラス出身者

**p.148**

テグ・アリー・“テグ”

Tega Alī “Tega” (生年月日無記載, バナーラス (カーシー) Kāśī)

「19世紀の人テグ・アリー‘テグ’は、ボージプリー語圏に含まれるバナーラスに在住するボージプリー語詩人であり、パールテンドゥ・(ハリスチャンドラの文学)サークルの一員であった。ムガル帝国の力が衰えた時代、それまでムガルの支配下にあった藩王が独立と自由を謳歌しはじめた。彼の『12ヶ月諷映 *badamāśa darapaṇa*』はボージプリー語バナーラス方言で書かれている。」

āṁkha sundara nāhīm yārana se laṛāvata bāṭa’ |  
jahara ka chūrī karejavā meṃ calāvat bāṭa’ ||  
suramā āṁkhī meṃ nāhī ī tū chulāvata bāṭa’ |  
bāṛha dutarphī bichuā pai caṛhāvata bāṭa’ ||  
attara dehī meṃ nāhī tū ī lagāvata bāṭa’ |

眼は美しくないが、多くの友たちを見ている。  
毒のナイフが心臓に切り込んでいる。(その眼差しという  
毒のナイフが、男の心臓を貫く)  
アイシャドウは両目にない、それでもお前はこれをつけて  
いる。  
大きなアクセサリーを足飾りにつけている。  
香水は体に無いがこれをお前はつけている。

**p.154**

クリシュナデーオ・プラサード・ガウル・ベラブ・バナルス  
イー

Kṛṣṇadeva Prasāda Gauṛa Beṛhaba Banārasī (1895 年生, バナーラス (カーシー) Kāśī)

「ガウル氏は初めはカーシーの D. A.V. College の学長を務め、後にはウツタル・プラデーシュ州上院議員に任命された。ヒンディーとボージプリーのほぼあらゆるジャンルで、ユーモア・風刺作品を作っている。」

agara netā bane ke bāya bana meṃ,  
banāva' jela meṃ sasurāla āpana |  
banārasa se na kabbo pāra paība'  
samajhala' ī gurū ghanṭāla āpana

もしこの森（社会の意）で指導者となるつもりなら、  
監獄を自分の（配偶者の）実家<sup>12</sup>とせよ（投獄をも恐れる  
な、の意）、  
決して（聖地）バナーラスから彼岸に行ってしまうな。  
（決して聖者のように俗世間を捨ててしまい、聖地バナー  
ラスからガンジスを渡って天国に解脱してはなりません。  
社会を改革するには、人々と共にあらねばならないのです、  
の意）  
これを理解せよ、賢くない我がお師匠様よ！。

**p.159**

パンディット・シヴ・プラサード・ミシュラ・“ルドラ”

Panḍit Śiva Prasāda Miśra “Rudra” (1911 年生, バナーラス (カーシー) Kāśī)

---

<sup>12</sup> この語には「刑務所」の意味もあるので縁語として用いられている。

「彼は熟練した教師であったのみならず、俳優としても、劇作家としても、高いレベルの詩人としても成功した。彼のボージプリー語の詩の言葉は、きびきびとして、(民俗的な) 諺の多く含むものであった。ガザルを書くことに彼は熟達していた。」

hathelī para sira rakha tohe dāna de bai,  
duārī pa tohare gurū jāna de bai;  
jo kāme na aība’ tūṁ hamare ta’ hamahūṁ---  
milī jaba ki mokā tabai tāna debai |

額に掌を当て(て懇願す)るなら、お前に私は贈り物をやろう、  
扉でお前の師として命を投げ出そう。  
もしお前が私の役に立たなかったら、私は  
機会があったらお前を詰ってやろう。

\* 本稿は科学研究費補助金(課題番号 23652081)の補助を受けて2014年8月にベナレスで行った現地調査の結果の一部である。ボージプリー語とその詩(主に本稿で取り上げたもの)を教えて下さり、ボージプリー語圏各地での調査に同行いただいた Devendra K. Singh 博士、ボージプリー語の文法を教わった R. B. Mishra 教授、ヒンディー語を御指導頂いている町田和彦、藤井毅の両先生に、深く感謝申し上げます。本稿に間違いがあればそれは当然著者の責任である。

#### 参考文献

BEAMES, John (1872-9, reprinted 1970) *A comparative grammar of the modern Aryan languages of India*. New Delhi: Munshiram Monoharlal

- GRIERSON, George A. (1903) *Linguistic Survey of India, Vol.V. Indo-Aryan Family, Eastern Group, Pt II: Specimens of the Bihari and Oriya Languages*. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing
- KELLOGG, Samuel H. (1938) *A grammar of the Hindi language*. London : Paul, Trench, Trubner
- MacGregor, R. S. (1995, reprinted 2009) *Outline of Hindi Grammar Third Edition Revised and Enlarged*. Oxford: Oxford University Press.
- MASICA, Colin P. (1991) *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge : Cambridge University Press
- MISRA, Ram Baksh (2003) *Sociology of Bhojpuri Language*. Varanasi: Swasti Publications
- SHUKLA, Shaligram (1981) *Bhojpuri Grammar*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- TAKEZAKI, Ryūtarō (2014) 「ボージプリー語の動詞組織について」 『東京大学言語学論集 (TULiP)』 第35号, pp. e171- e192. 東京大学大学院人文社会系研究科文学部言語学研究室.
- TIWARI, Arjun (2014) *Bhojapurī Sāhitya ke Itihāsa*. Banaras: Vishwavidyalaya Prakashan
- TIWARI, Udai Narain (1954) *Bhojpurī bhāṣā aur sāhitya*. Patna: Bihar Rashtrabhasha Parisad
- TIWARI, Udai Narain (1960) *The Origin and Development of Bhojpuri*. Calcutta: The Asiatic Society.
- VERMA, Manindra K. (2003) Bhojpuri. In: George Cardona and Dhanesh Jain (eds.) *The Indo-Aryan Languages*, 515–537. London: Routledge.
- 古賀 勝郎, 高橋 明 『ヒンディー語・日本語辞典』 大修館書店.